

ペン俳句会 句(第三七七号)

令和八年一月六日(火)

兼題『正月』一切、席題は無し。

句会を、フォト句会と同じ場所で開催。投句七名。出席七名。(欠席は良知さん、ゆふきさん、金魚姫さん)

松田 一文字

蹲踞に沈む深紅の落葉かな

暁闇や三々五々に初詣

冬ざれや夕陽に赫き柿ひとつ

年始め真新(まさら)の日記開きけり

星空や遠く近くの除夜の鐘

山茶花の散り敷く露地や釜滾り

中村 晃也

さざ波や大利根越しの初筑波

海苔の香に柚子の香加へ雑煮餅

指揮棒の止まり間もなく除夜の鐘

水神の祠や小さき雪囲い

味噌付けし葱が肴よ一人酒

落ち葉踏み単独行の山歩き

大津そうかい

柚子の香を纏ひ湯船を出でにけり

回り来る寿司と幸せ年新た

年の瀬や白き航跡母港へと

寝坊せし妻の照れ顔冬薔薇

待ち侘びし妻を迎ふる冬の暮

霜焼や机はりんご箱なりし

長尾 進一郎

長風呂や湯気に霞める天井灯

残雪の峠を越へて汽車着けり

春光る水上スキーの航跡に

朝刊紙外の寒さも届けをり

ひっそりと梅開きたりビルの陰

日差し浴び庭の木の芽の薄緑

宮原 凧

紅筆に立てる小指や初鏡

丸の西角の東の餅を焼く

箸袋子らの名を書き節料理

夜嘯は平家の件(くだり)冬の月

前かごや葱のはみ出る特売日

着信音ナースの走る冬の夜

安藤 晃二

正月の儀仗兵めく並木かな

正月の娘帰り来ひと日かな

この星の自転想える大晦日

灌木を微かに揺らし寒すずめ

杜深く大樹に名残鳶紅葉

银杏枯れ高木振りに気圧されぬ

西川 知世

注連かけて車三台停めてあり

買い初めの不愛想なるレジ袋

糊まだ固し読み初めの栞紐

掘り返す渋谷駅前初句会

繭玉の枝垂るる店に蕎麦を食ぶ

父母と会うて初夢より覚めぬ

次回は令和八年二月五日(木)。兼題は「節分」(松田一文字さん出題)。席題は西川知世さん出題の「坊」。

季語を学ぶ 初学にかえって

西川 知世

二月の兼題は「節分」 晩冬の季語。季節が冬から春へ移り変わる時をいう。立春の前日であり、旧暦で、うるう年には年内立春となる。古称に「節替り」の言葉がある。豆撒きや柗を門に挿すなどは、陰陽道の古くからの行事であったが、今では幼稚園で豆撒きが盛んなように、子供の行事にいつからか変化している印象がある。しかし、大きな神社の大切な行事であることには違いなく、豪壮な豆撒きが行われてニュースになる。

私が子どもの頃は、暮れ方に近所から豆撒きの声が聞こえてきて、帰ってきた父に豆を撒いたり、夜遅くまで騒いでも叱られない楽しい日であった。育った神戸の下町では、豆撒きのあと、その年の

恵方のほうを向いて、巻きずしに丸のまま齧り付くことも節分の夜の楽しみであった。恵方の方角は、寿司屋の店に張り出されていた。食べる間は決して声を出してはいけない決まりで、興奮した子供たちを鎮める親の知恵だったのだろう、懐かしく思い出す。

節分や鬼もくすしも草の戸に

高浜虚子

節分や家ぬちかゞやく夜半の月

水原秋櫻子

節分や夕焼の濃き杏色

森 澄雄

節分の豆少し添へ患者食

石田波郷

送らるる節分の夜のよき車

星野立子

節分の豆にまじろぎ檻の鷲

加藤秋邨

節分の豆少し添へ患者食

石田波郷

節分や海の町には海の鬼

矢島渚男

柁を挿すひびも古り軒柱

山口青邨

節分や太鼓に明ける神の森

菅沢泰子

節分の鬼追ひ出して早寝せり

坂口良子